

K O Σ M O Σ

Vol. 11, No. 2 (No.34)1976. 11. 11

刊行十年を祝して

園 田 義 道

「コスモス」という題で発行されている図書館ニュースが今年で10年を迎えるので、何か祝辞を述べるようにとのご依頼をうけた。私は今年3月で定年退職したのであるが、在職中研究室の机の上にときどき「コスモス」が載せられているので、ある時は読み、また忙しい時は読まずにそのまま机の抽出のなかに入れていた。何故既に退職した私に祝辞を書けと言われるのかと、最初一寸不思議な感じがしないでもなかったが、思い返してみると、確かにそういうものを出すことを決めて実行に移したのは10年前私が館長をしていた時のことであった。

当初の表題は文字通り「図書館ニュース」であった。発刊の言葉を書いたのは館長であった私であるが、何故出されるようになったかと言えば、そういうものを出す必要がかねがね痛感されていたが、まさに機が熟して生まれ出たのであると言うべきであろう。私はとり上げた産婆なのである。

生まれた子はすくすくと育っていった。最初編集は単一者が行ったのであるが、現在は編集委員会が構成されているようで、これは明かな進展である。また表題も「コスモス」と改新されている。16世紀のイタリアの哲人ブルーノは大宇宙に対して、人間はあらゆるものを包蔵しているが故に小宇宙と呼ばれるべきものであると説いている。大学図書館はあらゆる基本的、根本的知識を包蔵すべき施設である。この表題は内包の豊かさを指向するものとして、あるべき大学図書館を表現している。ここにもまた進展をみることができる。

産婆はとり上げた時のことを思い出し、その生成ぶりをみて喜悦を禁じえないのである。

(元館長)

特集 10周年記念号	
巻頭言	1
記念座談会	2
K O Σ M O Σ の軌跡	6
旧哲学堂図書	7
参考図書の解題	8
閲覧係より	9
視聴覚室より	9
日誌(昭51年6~10)	10

特集 ΚΟΣΜΟΣ 10周年記念座談会

ΚΟΣΜΟΣ を語る

1976. 10. 8. 於 図 書 館 会 議 室

—参加者—

池田 勉(館員)

伊藤良久(館員)

岡田 温(新館移行
時館長)

河村道也(館員)

小島 浩(館員)

園田義道(創刊当時
館長)

山下忠孝(分館長)

<五十音順>

司会
後藤辰男(現館長)

司会：今日はお忙しいところお集まりいただきまして有難うございました。図書館で出しております図書館ニュース(後にΚΟΣΜΟΣ)が発刊以来10年目を迎えました。これを記念しているいろいろと今までのΚΟΣΜΟΣを中心として歴史的事象があったわけです。こういうことについて貴重な資料としても、それからまたΚΟΣΜΟΣがますます発展するための資料としても、御意見やお話しをおろかがいしたいと思ってお集まりいただきました。よろしくお願い致します。ΚΟΣΜΟΣの経過と図書館自体も旧館から新館に移りましたので、そういう事柄に対し面白いエピソードがございましたら、それもまじえてお話しをしていただけたらと思います。まず初めに、現在ΚΟΣΜΟΣと言っていますが、刊行に当ってどのような発行動機と言うか、学内の期待をになつて現われたのか、その当りのお話しを受けたまわりしたいと思います。

教員・学生・図書館の交流を計る

園田：図書も増え、館員も若干増え——これはなかなかこちらが希望する程増えなかったのですが——特に80周年の記念事業として大学当局も新館建設を約束しているわけで…そうしたことで盛り上げてきて…、しかし、教員・学生と図書館と相互にわからない点が沢山あるわけです。それで、三者のコミュニケーションを計ろうとする時期が来たと言うので、館員全体の賛成を得、これを出すことにしました。第1号は発行人が河村君になっているわけですが、後に館長が責任者であるということで、館長の名前に訂正しました。

司会：園田先生時代と言うのは、東洋大学図書館が近代化に向けた時代です。そういう意味で、図書館ニュースは図書館の近代化の一つというふ

うに考えてよろしいわけでしょうか。

園田：そう考えてよろしいと思います。

司会：その時、編集の立場に河村さんがいたわけですが、どんな図書館ニュースにしようとして出発されたのでしょうか。

河村：大学で出すものですから、アカデミックなニュアンスが少しでも出せればと言うことで、第1号の表紙には貴重書の「松姫物語」を載せました。解説には、国文の吉田幸一先生にお願い致しまして書いていただきました。当時、御世辞かもしれませんが、園田先生に褒められ、だいぶ嬉しかったことを記憶しています。

司会：現在は8ページですが、当時は4ページでしたね。

河村：はい、内容も初めは何を取り上げていいかわかりませんでしたので大変でした。

司会：三者のコミュニケーションと言いましても所謂高度な意味でと考えていいわけですね。

園田：そうですね、単なるPR誌としてはなく……。

司会：当時は何部くらい刷られたんですか。

河村：現在のように2500部と言うような数ではありませんでした。今資料が手元にありませんが、現在より多少、少なかったと思います。

司会：今は図書館内数ヶ所に配置し、自由に持ってもらうという原始的な配布法ですが、当時の配布方法はどうでしたか。

河村：キャンパス中を配って歩きました。キャンパスがこんなに広くありませんでしたから、それでもこと足りたんです。一つはそうして配って歩きますと、いろんな受けとめる方の表情が見られるわけですから、そんな反応もちょっと見たかったという欲張ったこともありました。

司会：教職員、学生の反応はどうだったのですか。

河村：そんな際立ったということはありませんでしたけれども、いつでも発行をまだかと待っていたいただいていたお得意さんも中にはいましたけれど、中にはすぐズカゴの中に入れてしまう人もいました。(一同笑う)

書物の世界は宇宙

司会：最初は図書館ニュースという極めて散文的な、解説的な表題でロマンが感じられないが、後には現在のようにKOΣMOΣという、しかもギリシア文字で、それこそアカデミックな形をとったわけですが、印象はいかがだったのでしょうか。

岡田：何んとも難しいような気がしましたね。(笑い)

司会：ところで、KOΣMOΣという名はどういうふうにして選ばれたのですか。

伊藤：以前、編集委員をした時に、工学部も合せて館員からアンケートをとったんです。当時どういうふうと考えられたのか記憶にないんですが、KOΣMOΣは宇宙という考え方から出てきたと私は解釈しています。

司会：特にギリシア文字で書かれている辺は？ 気取りとか。内容にも“ぶらざ・で・りぶろ”(本の広場の意)とありますね。ラテン語かギリシア語じゃなくてはいけないのですか。

伊藤：そんなことはないと思っています。

司会：KOΣMOΣの由来といえば、書物の世界は宇宙というイメージで図書館を理解していいんでしょうかね。これからも、名前の由来に沿った編集というのを、心がけていかなければと思います。KOΣMOΣを出していく過程で、これにまつわるエピソードみたいのがありますか。

河村：以前に一度、原稿を全部タクシーに置き忘れてしまったんです。それに、先生方はか皆様書いて頂く原稿は、無償で書いて頂くものですから尊いものです。金めものではないので出てくると思っていたんですが、とうとう出てきませんでした。落した後、食欲がなかったです。よ。で、先生方が書き直して下さると聞いたとたん食欲が出て、一日四回位、飯を食った記憶がありますよ。(一同爆笑)

司会：それは何号の時なのですか。こういうことがあれば、園田先生のお耳に入ったと思いますか……。

園田：記憶にないですね。

小島：もう十何年勤めていますけれど、初耳ですね。(全員大笑い)

興味あるアイデアとは？

司会：あとは順調に発行されてきたように拝察しているのですが、旧館時代から新館時代に移った時に、新たな意欲というものが湧いて、編集方針等に変更を生じたとか、その辺はどうでしょうか。

岡田：当時のニュースは教員中心だった様に感じていました。貴重書等の中心ではなしに、閲覧傾向とか学生に関するものを載せ、バランスよく編集すべきだと思っていました。そのなかで……たて書きからよこ書きになったのもその一つでしょうか……。

園田：私が館長をしている間は、図書館ニュースについては何も特筆すべきことはないですね。というのは、新図書館の建設の準備とか、大学院の増設とかで忙殺されて、館員の方には誠に気の毒で……しかも、そのなかでこういうものを作るのは大変だったのです。

司会：ここで新館移行時のエピソードを少しお話していただいただけませんか。

岡田：私がきた時にはプランが既にできていました。新館は工学部の平山先生が学生の希望を聞きながら設計したので、他の大学にくらべ、かなり内部構造が考慮されていた気がします。当時としては、チェックポイントがないのは＝誰でも自由に入館できる＝新しい設計だったと思います。当時(旧館時代)、図書が分散していたので一ヶ所にまとめるということは大変なことでした。この時は、上野の国立図書館の約100万冊を三宅坂の図書館(国立国会図書館)に運んだ例にならって、本館も館内にベアリングを敷いて運搬しました。

司会：ところで、最近のKOΣMOΣは体裁だけでなく、図書館利用案内のような興味あるアイデアの必要性があるように思います。

小島：そのアイデアとしては、投書箱でいろんな苦情や、要望が来るので、それをKOΣMOΣの中で解答するという。これなどはきわだっていると思います。利用者も直接図書館に参加する。それに対して図書館も解答していくという意味で、利用者と図書館と共通の場としてのKOΣMOΣが出てきたように思います。

司会：利用者が直接問題をぶつけられるKOΣMOΣと評価していいわけですね。

池田：河村さんが最初編集されていたわけです。河村さん一人でやるには大変だったので、後になって、編集委員会が設置され、それからは、内容的には豊富になっていると思います。

伊藤：組織上は一つの発展ですが、編集委員がかわってしまうと中途半端になってしまうので、多少の欠点が出てくるようにも思われます。

池田：いろんなものをニュースに載せてピーアールした方が紙面としては素直な気がします。その点では、かなり充実してきていると思います。

どう対応するかKOΣMOΣ

司会：ところで、現在、分館側でKOΣMOΣの内容が白山に片寄っていると言われていました。当時（創刊）と今と比べてどうでしょうか。創刊当時から、そういうことを十分気をつけてこられたのでしょうか。

河村：分館で要求があり、一ページ取ってこれと言うことでした。あの頃のページ数の少ないニュースですと結構なスペースになりますが、それでも結局分館のニュースを本館に吸収したことは事実です。

池田：KOΣMOΣのスタッフに工学部の人も入っていますが、だんだん本館中心のPR誌になりつつあるように思われます。これは、ニュースを編集する際、考えなければならないし、今後、朝霞に開校するとなりますと、東洋大学図書館ニュース・KOΣMOΣというタイトルでありながら、白山中心になっているということは考えなければならないですね。本館・工学部・朝霞の記事を一括していくのか、或いは、それぞれ分館としてのニュースを作るのか、この辺は将来考えなければならない課題だと思います。

司会：最初の頃の編集方針を見ていると、最初は貴重書の解説が載っていますね。最近、私の文章が巻頭になっているケースが多いですけども、何だか力が抜けるような気がするのですが……。やはり、アカデミックな記事が表紙に出た方がよいと思うのですが……。

園田：私が辞めてから、かなり年月が経っているし、学内の実状、図書館内部の事情が変わっているので、積極的な話しは出来ません。もう少し勉強すれば言えるかもしれないが、今はなにも言えませんね。

司会：ところで、編集にたずさわっていて、今度は何にするかということが一番気になることですが、その辺の苦勞を過去から現在のところまで少しどうでしょうか……。

河村：貴重書の表紙のことが出たので話しますが、貴重書を出したのは、アカデミック……気取りがあったのかもしれませんが、一つはやはり、東洋大学にはこれだけの貴重書があるということだったのです。が、逆に見れば、本学にはこれだけしか貴重書がないのかと見られないとも限りません。さらに、各大学にも配布しますので対外的なものには、大変、神経を使わなければなりません。今も仕事の合い間にやるわけですから、その意味では大変だと思います。

司会：歴代館長の努力のおかげで、今年は和歌文学会と、解釈学会に関した貴重書を学会を機に展示することができました。とにかく、それだけのところまできているのです。

これからの図書館ニュース・KOΣMOΣに、更に掲載していきたいというような企画等があるのでしょうか。年四回を通じて、特集ものをシリーズでやっていくとか、その時々で書評で問題点を洗いだすとか、一方でそのようなしっかりした企画をたてていくと一年間を通して、編集の方が多少なりとも楽じゃないのかと思います。工学部の分館からみましてどうですか。

山下：そうですね、多少現在のところでは物足りないという気がします。欲を言えば学生に役立つものを書かせてもらえればと思います。私のおすすめの一冊の本――各学部教員の書評――というのがありますね。あれなどは非常にいいと思います。最近の学生はあまり本を読みませんが

ら。読ませたいですね。

司会：これだけ学生数が多くなると、どうしても啓蒙的傾向が強くなってくるのはあらそえないことですね。

河村：お話しの途中で、レファレンスでは新館に移ってから、図書館の利用パーセンテージが大きく変わってきました。もっとも以前は学生数も少なかったのですが。今は、こういう本を是非見たいという要求がありますから、そういう本をもっと紹介できたら。それで、学生が関心を抱けば意義があると思うんです。

司会：何か記事一つで随分、反応が違うんですね。そのあたりは開かれた言葉によって、今後、どんどん呼びかけ、呼びかけには開かれた言葉が必要という気がしますけれど。同時に、図書館、図書館界の情勢も伝えなければならぬし、図書館自体のことも伝えなければなりません。まあ、とにかくいろんな問題があると思うんですけれど。

河村：ですから、教員、学生、それから館員の三位一体となったものがうまくつくればと思います。常にそういう方向に進む指針があれば、峠に登りつめることができると思うのですが……。

小島：KOΣMOΣも年4回出していますが編集の中味のパターンがだんだん決ってきたような気がします。例えば4・5月に出るニュースは、新入生を対象に企画し、秋頃出るものには、読書案内とか図書館の事務報告とか、何かパターンが決ってきたように思います。しかし、最近新着貴重図書の紹介が行なわれていませんので、今後また続けていっていいような気がします。

今後の図書館への期待

司会：毎日出している訳ではないので、アップトゥデートな紹介は出来ませんが、本当に今から見ても古典になるというような本はつかまなければいけないですね。そういうことがこれからの期待というところでしょうか。これまで大ざっぱにKOΣMOΣ10周年と云うことでいろいろお話しをしていただきました。さて、この10周年の間に旧館から新館に移った訳ですが、この時に図書館のあるべき姿等に関して反省や、今後の期待を含

めてお話しください。

園田：新図書館に移ってからどういうふうに通営され、どのような欠点があるか、追跡していないので積極的に話すことができません。前の図書館はひどすぎるので……。現在は、実に立派なきれいな図書館ができたので喜びの感じの方が先にでます。

司会：最近では雑誌のための部屋が独立的になければいけないということが強く出ています。

園田：それは新館建設の段階でも大きな問題の一つでもありました。私もヨーロッパやアメリカの図書館を見てきて、雑誌のフロアがありますね。そういうのがあればいいんですが……。さらに、談話室を持っているところもたくさんあります。

司会：談話室は贅沢であると言うような意見もあるかもしれませんが……。

園田：館内で喫煙できる場所なんかね——。

伊藤：KOΣMOΣもそうですが、やはりいろんな機能を一堂に設置しなければならないところが悩みなんです。

司会：工学部の場合はむしろ、雑誌の方が重要資料がありますので、雑誌室を充実させることが大事ですね。その点、図書館全体の盲点だったのかわかりませんが、図書館というと貴重書が先に出る可能性があるような気がします。

園田：貴重書はあった方がよいのですが、それは収めるというより、むしろ、偶然的なものですね。

司会：図書館が保存から活動そのものを象徴するようになってきていると言っていいのですが、意外に学内の評価は高くないですね。依然として附属図書館という名前が暗示するように、附属施設としてしか扱われないところがあるようで、誠に困ってしまいます。

この他に、具体的な図書館の諸設備、又は取書等の問題についてもお話していただいたのですが、時間も超過しましたので、この辺で終了させていただきます。本日は貴重なご意見やお話をどうもありがとうございました。

注：紙面の都合により、一部割愛させていただきましたので、悪しからず御了承下さい。

ΚΟΣΜΟΣ

10年の軌跡



図書館ニュース

創刊号
1966
41・6・1発行
毎月1回発行

発行所 東京都文京区昭和17 東洋大学附属図書館 TEL(946)5231



図書館は、大学社会の最も重要な施設の一つとして、その発展を遂げてきた。その発展の軌跡を、この創刊号を通じて、我々が追憶する。...

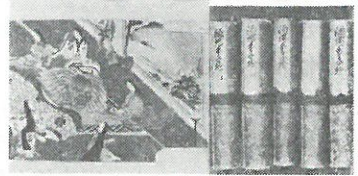
1966年6月1日 創刊号

創刊のこぼれ
佐藤 雅夫 田代 義道

図書館ニュース

No. 12
1969
44・9・20発行
NKA 中委 博

発行所 東京都文京区白山5丁目目黒の30号 東洋大学附属図書館



三つの図書館

「三つの図書館」とは、東洋大学附属図書館、東洋大学附属図書館、東洋大学附属図書館。...

1969年9月20日 12号

THE TOYO UNIVERSITY LIBRARY NEWS 東洋大学図書館ニュース

Vol. 5, No. 1 1970. 9. 15

大学のオアシス 中 途 博

巻頭言	1
ニュース	2
大いなる声	3
創刊の経緯	6

「大学のオアシス」という言葉は、私の故郷である東洋大学附属図書館に由来する。...

1970年9月15日 13号

東洋大学図書館ニュース

ΚΟΣΜΟΣ

Vol. 6, No. 1 1971. 6. 15

巻頭言	1
ニュース	2
大いなる声	3
創刊の経緯	6
創刊号の発行	7
創刊号の発行	8
創刊号の発行	9

「明治期刊行図書目録」を手にして 岡田 温

このたびは明治期刊行図書目録の第一巻が刊行された。...

1971年6月15日 14号

東洋大学図書館ニュース

ΚΟΣΜΟΣ

Vol. 11, No. 1 (No. 33) 1976. 6. 30

巻頭言	1
ニュース	2
大いなる声	3
創刊の経緯	6
創刊号の発行	7
創刊号の発行	8
創刊号の発行	9

夏休み、旅への、いや読書への誘い 伏 藤 辰 男

夏休み、学生がらごらごらと、特別な時間の第一の楽しみは、日本の旅へ向かうことだ。...

1976年6月30日 33号

館蔵旧哲学堂図書館図書

「哲学堂案内」及び「哲学堂図書館図書目録」の緒言によれば、学祖井上円了博士が約三十年間私財を以て購入した図書のうち、特に明治維新前に著述された和漢古書6,792種、41,585巻、21,193冊（事實は「大日本統蔵経」など明治以後刊行書をも含む）を絶対城と称して、読書堂に収蔵し、大衆の利用に応えんとしたのがこのコレクションである。井上博士の令息玄一氏が哲学堂を東京都に寄贈して以後、全くの死蔵に化していたと言われる。昭和28年に理事者がこれに眼をつけ、当時、都の民生局長であった磯村英一現学長の尽力もあり、本館に寄託されることになり、51年7月には寄贈される事になったのである。

井上博士の研究は、西洋の哲学、心理学、倫理学にも及ぶが、その主たる対象は、

1. 仏教の思想的研究（学位論文：「仏教哲学系統論」そのうち既刊は「外道哲学」のみ）
2. キリスト教批判（「真理金針」「破邪活論」等）
3. 中国思想研究（卒業論文：「読荀子」）
4. 妖怪学。
5. 独得の哲学説。

に大別することができる。しかし、その中心的研究対象は、仏教の思想的研究にあると考えられる。蔵書構成もこれに対応する傾向があり、それらの研究テーマを核として更に網羅的に収書されている。分類についてこれを言えば、全蔵書を国漢書と仏書に二大別され、それぞれを五十類と余類に分類している。仏書を如何に重視しているかわかる。特に目についた図書に就いて述べると、国漢書は、キリスト教批判関係図書—第2類の神教部に分類する、ハビアン（フツス）の「破提字子」、阿満得聞の「斥耶蘇」、杞憂道人の「關邪管見録」など。中国思想関係図書は、第3・4類経書部、第5類諸子部、第6・7・8類儒書部とも、中国と我国の双方の図書が収蔵され、荀子は二点のみであり、吉村秋陽（晋）の「王学提綱」など陽明学関係にも及んでいる。妖怪学関係は第38—40類の3類に怪談草紙部に充てられ、諦忍の「天狗名義考」、誓誓の「信田白狐伝」、平田篤胤の「古今妖怪考」などがあり、明の瞿佑の「剪燈新話」の句解などもここに分類している。

15類に地理紀行部があるが、「南船北馬集」16冊、「南半球五万哩」、「支那旅行日誌」（未刊）などの著述がある如く、非常な旅行家であった関係もあり、それに資する事が多かったであろう。

第33—34類修身道話部は、「修身要鑑」、「大正菜根譚」などの著があるだけに参照利用した事であろう。南宋の洪邁の「夷堅志」の和解をここに分類するのは、意図的にそれらしき、内容の部分のみをピックアップして和解したものであるからであろう。第36類相法ト筮部は、井上博士に「哲学うらない」の著述があるが、これらの迷信的な側面を哲学によって補わんとする意図にたって書かれている。

仏書についてこれを述べれば、

第1類梵学部、第2類因明部、第3—5類史伝部と語学、論理学、歴史の順に分類し、第6類は外道及び小乗諸宗部を収め、以下第7—22類までは、各経・論の鈔・注・疏などの研究書に充て、経・論の本文は第50類蔵経部の「縮刷大蔵経」にゆづっていると思われる。ついで第22—40類までは各宗の関係図書を充てている。但し第25類天台部に龍樹の「智度論」の本文を分類するのはいかがであろうか、周知の通り、本書は「般若経」の積論であり、「大正蔵経」やそれによったと考えられる「日本十進分類法（NDC）」は経論部に分類するが、「大明蔵経目録」の如く大乘論に入れるのも一方法であろう。第44類隨筆部に和刻本ではあるが明の株宏の「竹窗隨筆」にまで及んでいるのを見れば、その収集がいかに広範囲にわたっていることがしのばれるであろう。

総じてこれを言えば、特に貴重と思われる図書は少なく、当時入手できた和漢書が中心であり、漢籍も唐本は極めて少なく、和刻本のあるものはすべてこれによっている形跡がある。従って個人の詩文集（別集）といったものはあまりなく、中国の地方志は存在しない。これがこのコレクションの欠点となっている。

尚、「哲学堂図書館図書目録」は、書名・冊数のみを著録した分類目録であり著者名はなく、索引がない。従ってこの欠点を補う為カード形式の書名索引を作成し閲覧係の所に保管し利用しているが、著者名索引については手つかずの状態であり、これが今後の課題と言えよう。（山内）

参考図書の解題

一本館一

一民族学関係一

大島 建彦 等編

日本を知る事典

(社会思想社) 昭和46年 1005頁

我々日本人は、日本のことを正確に、どれだけ知っているだろうか？ たとえば能楽とか、華道、茶道、香道とか、年中行事、又は純日本料理、或いは、仏教等々。もしも、外国人に、日本について聞かれたとして、果して、どれだけ、この内から正確に答えられるだろうか。我々が、祖先から、精神の糧として継承してきた、民族的文化遺産、生活、伝統がともすれば、失われ勝ちである今日此頃、ここに、広く、深く、日本を知る事が出来るものとして本辞典は、好個の資料である。

本事典は、従来にない形式を取り、五十音順の配列をやめ、単なる五十音の解説事項はさげ、詳細な解説を付し、「読む事典」の形式を取っている。

大型の菊版で、びっしり活字を組み、凡そ千頁以上(1005頁)何の章、どの項目から読んでもよいように、相互に、関連ある事項が並んでいる。

執筆者は、大島建彦、吉田光邦、林屋辰三郎、祖父江孝男、杉本つとむ、斉藤正三郎等50名。過去から、現在まで続いている日本の、伝統的生活、慣習、思考等について12の章をもうけている。本文目次に見られる各項目は、誕生の予祝から、葬式までの礼を解説した「人の一生」から始まって、家族と社会、職業、すまいと家具、きものと化粧等全12章に別れ、最後の「日本人のこころ」の章は、「自然のみかた」「人生のみかた」「美を求める心」「日本の美」の4項目より成っている。「人生のみかた」は日本思想史の要約になっている。本書は、中心を、大項目にとっているが、中、小項目も、必要に応じもうけている。読む事典の形式をとってはいるが、小項目の事典としても利用し易いように、巻末の索引を充実させている。なお、本書内の写真については、巻頭に、写真一覧表を章別に配列してある。又、図版(写真版、凸版)の番号は、各章別に通し番号とし、図版の地名については、特別なもの以外は、府県郡(市)まで明記してある。以上本書は、日本を知るてがかりとして通読するには、優に、百科事典一冊に匹敵するボリュームなので、やや至難ではあるが、おりにふれ、興味を覚えるところを拾い読みしてゆけば、大変勉強になるのではなからうか。出来得れば、座右の銘として、日本を知る上の資料としたい事典の一つでもある。

(382.1:N)

一工学分館一

R. S. Burington, D. C. May 共著

林 知己夫, 脇本和昌 共訳

確率・統計ハンドブック

(森北出版)

現代の数学的方法や統計の方法は、社会の多くの分野において非常に大切な役割を演じており、その役割は、ますます重要になってきている。

この本は、「広範囲の人々の要求に応ずるような、わかりやすい確率・統計のハンドブック」を目的としたもので、理論やデータを取り扱うルールとか実際問題の解などを手ぎわよくまとめている。単に用語の定義とか式の羅列に終わることな

く、その根底をなす統計的思考、方法が簡単に書かれており、内容の理解に役立つと思われる。

また巻末の詳しい統計数値表と照らし合わせながら読んでゆくことにより、正確な統計的知識を身につけることができる。巻頭には読者のためのフローチャートをつけ、索引には日本語と英語との相互参照をつけた、など、よりよい理解を助けるような配慮をつけてあるので十分活用していただきたい。なお、この本は、Burington と May による「Handbook of probability and statistics with Tables/2nd edition」の日本語版である。

(418.036:BR)



閲覧係からお知らせ

新型自動複写機 (U-BiX 1500) 設置のお知らせ

図書館では、昭和48年11月に自動複写機 (U-Bix 800) を購入し、研究活動ならび、資料入手に便宜をはかってきました。

しかし、近年の情報化社会においては、文献複写が重要な位置を占め、図書館においても、利用者が大幅に増加し、試験期、レポート提出期には、混雑し、過熱による故障が生じました。他方、使用硬貨が、10円硬貨専用機の為、10円硬貨を、あらかじめ両替し、用意しておかないと、使用出来ない不便さがありました。

新型自動複写機の特徴としては、つり銭が出来ること、コピー枚数は、投入金額に応じて何枚もコピーすることが出来ることです。使用硬貨は、10円硬貨と100円硬貨のみで、50円硬貨を使用しないよう十分注意して下さい。

新型自動複写機の利用方法は、下記の通りです。

- ①硬貨を投入する。(最高990円まで入ります)

- ②原稿をのせる

- ③プリント・ボタンを押す

(100円硬貨2枚投入の場合は、プリント・ボタンを、10回押すだけで、10枚のコピーが出来上がる)

- ④つり銭の残った利用者は、つり銭ボタンを押す。

(両替機としては、使用出来ません)

現在、著作権に関する社会的問題がマスコミ等によって、クローズアップされています。今後は、複写機利用細則を守り、利用者各自が十分注意して、正しい方法で利用して下さい。

(わからないことがありましたら、カウンターの係員まで申し出て下さい)



視聴覚室からお知らせ

★語学テープの貸出期間は1カ月に延長されました

語学の学習は繰り返し聞くことが大切であり、そして資料によっては60分テープが5本以上あるものもあり、1週間という短い期間では十分に活用できなかったことと思います。以上の点を係で検討した結果、資料数を一段と充実させ貸出期間を延長することにいたしました。多数のご利用をお待ちしております。

★個人利用の開室時間は更に延長され、午後2：00～5：00まで利用できます

前期より午後2：00～4：30までの時間を個人利用にあててきましたが、利用者が多く、予約しなければ聞けないという状況があり、少しでも緩

和するために開室時間を更に延長いたしました。皆様のご来室をお待ちしております。

★16ミリ映写会のご案内

現在毎月1回の割合で、16ミリ映写会を開催しており、はや12回目を迎えております。いまだ図書館でこのような活動が行われていることを知らない方も多いと思いますので、次に今後の予定をお知らせします。

11月25日(木) 映画 イタリア名画「鉄道員」
(白黒)

12月16日(木) 映画「ベートーヴェン第9(合唱)」カラヤン指揮 ベルリンPO(カラー)

以上の作品は午後6時から第3閲覧室にて映写いたします。日時の変更については、2階入口に掲示いたします。

日 誌 (51年6月～10月)

- 6月11日 図書館連絡会
 23日 図書選択委員会
 25日 逐次刊行物分科会 (於本学図書館, 栗沢, 河田, 中川参加)
- 7月1日 図書課橋本光五郎学生課へ異動, 人事課黒崎千鶴子図書館へ配属
 5日～10日 青葉学園短期大学図書館学課程履修生6名を, 実習生として受入指導
 12日～17日 図書館新人研修 (大間, 黒崎, 小谷参加)
 17日 書誌分科会 (於本学図書館, 山内, 村田参加)
 19日 逐次刊行物分科会 (於城西歯科大学, 中川参加)
 20日 立教大学図書館, 倉岡みち氏他2名, 見学のため来館
 21日 沖縄国際大学図書館, 新川宣安氏, 見学のため来館
 22日～23日 私立大学図書館協会総大会 (於日本大学, 本館: 山内, 村田, 分館: 米山, 中村, 岩田参加)
 23日 分類分科会 (於東京家政大学, 日野参加)
 24日 早稲田大学図書館 (元コロンビア大学ローライブラリー司書) 山本信男氏を招き講演会開催
 26日～27日 私立短期大学図書館担当者研修会 (於青山学院女子短期大学, 丸山参加)
 27日 解釈学会 (短期大学日本文学科招致) 貴重書展示 (於第三閲覧室)
- 8月5日 山崎真理子 (整理課) 退職
 9月11日 図書館業務研修 (於全国町村議員会館)
 14日 所蔵目録作成小委員会
 18日 和歌文学会 (国文学科招致) 貴重書展示 (於第三閲覧室)
 22日 図書館運営委員会, 合同委員会, 図書選択委員会

- 24日 逐次刊行物分科会 (於法政大学, 栗沢中川参加)
 分類分科会 (於本学図書館, 日野参加)
 25日 書誌学分科会 (於本学図書館, 山内, 村田参加)
 27日 大妻女子大学司書課程学生3名見学のため来館
 図書館連絡会
 27日 近世史料取扱講習会 (於岡山県総合文化センター, 高橋参加) 10月1日まで
 28～29日 故風岡浩教授蔵書, 未亡人より寄贈
- 10月8日～9日 私立大学図書館協会東地区部会 (於東北学院大学, 山内, 大和田参加)



編集後記

今年もまた, 枯葉の舞い散る季節がやってきましたが, ここにやっと, 第2号を出すことができました。

今年は丁度, KOSMOS 発刊10周年にあたるため, 今号では「KOSMOSを語る」と題して, 記念座談会を開きました。何しろ, 1時間半にもわたる座談会のため原稿をおこすのに一苦労! それに, 今回は2ページも増え, 編集に慣れないせいもあって, 随分と発行が遅れてしまい申し訳ありません。この紙面を借りまして, お忙しいなかを座談会に出席して下さいました皆様方をはじめ, 御協力いただきました方々にお礼を申し上げます。

又, 特集等について, 御意見・御感想などありましたら, どしどしお寄せ下さい。編集委員一同楽しみにしております。

(伊藤美・黒崎・黒沢・森・高橋)